

目的 戦後といわれてやがて40年になろうとするが、この期間のファッションをみると日本の経済力や社会情勢の影響を受けながら変遷し続けている。人びとのファッションの意識や衣服に対する考え方もおおいに変化してきた。被服構成の技術面に於ても、新しい素材、縫製用具、縫製機器の開発により変化を来たしている。これらのことをふまえて、女性ファッションを主に流行の移り変わりを調べることにした。その中から「私たち現代人にとって着るとは何であるか」を考察してみたいと思う。

方法 流行にはピークや流れを失なうので時間や年月の単位で区切ることは難しいが今回は終戦直後の昭和20年から約10年間を一区切りとして変遷史および時代背景を文献などから分析し具体的な事例のなかから見出したい。

結果考察 終戦直後、食べることに精一ぱいであったから、身なりなどに構う余裕はなく、アメリカ軍が駐留し、その勢力が強かった昭和20年代前半はファッションもアメリカモード中心であった。物資も乏しく布地も少ないためにキモノ地で作った服や更生服が幅をきかせた。後半になって衣料統制は廃止され、物需、糸へん、金へん景気晴れを経て、経済復興は目ざましく庶民の生活は「食から衣の時代へ」と変わり初めた。さらにこの5年間は化学繊維の開発も顕著で衣の面は大きな影響を受けた。また西欧諸国との交流再会に共ないフランスモードのファッションブームが開幕され昭和28年頃からはアルファベットラインが流行しハロリー・ビーネン時代は拍車がかかった。